



長期投資仲間通信「インベストラيف」

I-OWA マンスリー・セミナー講演より お金と向き合う 三つのステージで考える逆算の資産準備

講演:野尻 哲史氏、レポーター:川元 由喜子

老後の為に 60 歳でいくら必要かという議論は、常に残高の話です。でも残高の話はやめて、引き出し総額に目を向けてくださいというのが逆算の資産準備の発想です。60 歳というゴール設定をやめ、代わりに 95 歳で資産ゼロ円、というゴールを立てましょと申し上げています。そこから時間を逆に遡るのです。

まず、あなたはいったいいくら要るのか考えましょ。

(退職前年収) × (生活費レベル%) × (生活年数) で計算します。生活レベルというのは退職前の生活費と比べた比率、生活年数は 60 歳時点からの年数ですが、女性で生存率 20% とすると 95 歳ですから、35 年ほど見ておけばよいでしょう。

これで計算すると、簡単に 1 億を超えます。平均的な数字で計算すると、

$600 \text{ 万円} \times 68\% \times 35 \text{ 年} = 14280 \text{ 万円}$

ここからもらえる年金額

$24 \text{ 万円} \times 12 \text{ か月} \times 30 \text{ 年 (受給年数)} = 8640 \text{ 万円}$

を差し引きますと、

$14280 \text{ 万円} - 8640 \text{ 万円} = 5640 \text{ 万円必要、と計算されます。}$

ここからが逆算の資産準備です。95 歳から 75 歳時点まで遡ること 20 年、この間はもう運用はしません。持っているお金を使い続けます。毎月の引き出し額は月 14 万円、ずっと引き出していくと、75 歳の時に 3360 万円あれば、95 歳でゼロ円になります





長期投資仲間通信「インベストラيف」

次は60歳まで遡ります。定年退職後、75歳までの15年間は運用を続けます。使いながら運用する時代です。この間の引き出しは残高の4%、運用利回りは3%を狙うとすれば、資産は毎年1%ずつ減っていくことになります。これですと、60歳の時に3950万あればよいことになります。60歳以降の引出額総額は5695万円となります。注目してほしいのは、残高ではなくて、引き出し総額の5695万円。先ほど足りないと言っていた金額とほぼイコールです。引き出し総額は残高とは違うということが分かれば、老後5600万必要でも、60歳で4000万ぐらいあればできる。ここで1600万ぐらい下げられるのです。

次に、定年後にも働くということ。60から65歳まで働くとして、残高を減らさない、というルールにしたら、60歳でいくら必要か。この期間(60歳から65歳)の収入が771万円とすれば、3233万円。これでまた700万円ぐらい少なくて済みます。老後働くということは、社会に貢献するといった精神的な意味もありますが、資産に対しても、これだけ違いが出るのです。

もう一つ。先ほど、平均的に68%と計算した生活レベル、これを60%まで下げたらどうなるでしょう。1割ぐらい生活水準を下げるわけです。受け取る年金は変わりませんので、自助努力の分が大体5600万円だったのが、4000万円くらいに減ります。4000万の引き出し総額でプランを作ってみますと、75歳以降の年金以外の引き出し額は10万に減ります。75歳まで3%で運用、4%ずつ引き出し、という条件は同じ。すると60歳で2800万円あればいいということになる。

これは意外と大きなインパクトですよ。ただ、単に節約しましょう、と言っても無理。「生活費水準」を下げるのですが、「生活水準」を下げないで済む方法として、地方都市移住というのも選択肢です。個人的には、四国松山などがお勧めですね。

一番初めの数字から、2800万まで下がってきました。こうなると、退職金だけでカバーできる人も出てきます。そういう人は、資金準備しなくていいということになる。「ダメだ」と思うのではなくて、「できる範囲のことがあるな」と思ってほしいのです。

講演ではこの後、退職後の資金運用のひとつとして「定率引き出し」の解説、現役時代の運用アドバイスとしてステップアップ投資、NISAやDC(確定拠出型年金)の展望などについて、その他にも各種アンケート結果などを織り交ぜながら、盛りだくさんの内容をお話いただきました。